

そでの
袖野 みほ
美穂

国際医療協力局
運営企画部 保健医療開発課
医師



★略 歴

- 2012年 金沢大学医学部医学科卒業国立国際医療研究センター病院 臨床研修医
- 2012年 亀田総合病院 初期研修医師（～2014）
- 2014年 国立国際医療研究センター 小児科 国際臨床フェロー（～2018）
- 2015年 国連パレスチナ難民救済機関（UNRWA）ヨルダン本部事務所 インターン
- 2016年 国際保健機関西太平洋地域事務所(WPRO)母子保健課 ボランティア
- 2019年 国境なき医師団 イエメン勤務（小児科医師）
- 2020年 国立国際医療研究センター 国際医療協力局入局
- 2021年 岡山県庁保健福祉部 新型コロナウイルス感染症対策室/医療推進課

修士： Johns Hopkins Bloomberg School of Public Health 公衆衛生学修士
博士： 順天堂大学大学院公衆衛生学教室在籍中

★現在の主な担当業務

- ・保健医療開発課（JICA事業在京担当：ラオス・カンボジア）
- ・保健システムチーム（国際保健医療協力集中講座：UHC/医療人材育成）
- ・LIMQSチーム
- ・医療技術等国際展開推進事業「病理サービス展開のための病理人材教育制度整備事業」
- ・JICA課題別研修
アフリカ仏語圏地域「女性と子どもの健康改善 -妊産婦と新生児のケアを中心に-」
（行政官対象）
- ・デジタルヘルスの国際的動向と低中所得国における効果的な実装に関する研究（研究協力者）

——— 袖野さんが、医師・国際協力を目指したきっかけを教えてください。

医師を志したのは、高校生の時、杉原千畝さんに関する本を読んで、時代によって世間の「正しいこと」が変わりうる中で、自分自身が正しいと思えることをしたかったためです。人の命を助ける仕事は、どんな世界であっても正しいことが出来ると思えました。

国際医療協力を興味を持ったのは、小学生の時にガールスカウトに入っていて、ちょうど湾岸戦争が終わったところで、自分と同じくらいの年齢の子どもたちが、食べるものがなかったり、亡くなったりしていることを知ってどうしてだろうと思ったのがきっかけです。

大学生時代には、タイやインドネシア、マレーシア、アメリカなど様々な国の医療施設を訪問し、世界に様々な医療があることを学びました。その中で、大学6年生の時に、パレスチナ難民救済の事業を行っている国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）というところで、臨床実習をさせていただきました。そこで働いている熱意あるパレスチナ難民の方々にお会いして、こういう方々と一緒に働きたいと思えました。



大学生時代、UNRWAの職員と。

UNRWAの職員の多くがパレスチナ難民で、彼ら自身がかつてはUNRWAの支援を受けている。奨学金を得て海外の有名大学院を卒業し、自民族のために貢献する職員らが、私にはカッコよく思えた。



夏休みにアメリカの大学病院で臨床実習。身体所見やカルテの書き方を教えてくれたのは、シリア人とイラク人のレジデント医師ら。本国では検査に頼ることが出来ないため、彼らの問診・身体所見取得能力は高かった。

——— 国際医療協力局に入職する前はどのようなキャリアを積み重ねていたんですか。

大学卒業後は、患者の疾病だけではなく全体を診ることが出来る医師にまずなりたいと思い、総合診療が強い亀田総合病院で初期研修を積みました。様々な困難な立場の人々に関心があり、亀田総合病院での研修期間中に、サンフランシスコの病院の難民クリニックで実習したり、南相馬市立病院という福島原発から一番近い病院の小児科で、地域の小児医療を学んだりしました。

その後、小児科医師としての臨床経験を積みながら、国際医療を学べる、国立国際医療研究センターの国際臨床レジデントになりました。国際臨床レジデントとして、様々な国（ベトナム、タイ、ラオス、フィリピン、モンゴル、ヨルダン）の母子保健に携わりました。

その中で、国際保健機関西太平洋地域事務所(WPRO)母子保健課での勤務で、地域全体の共通規範を策定することの影響力を意識するようになりました。国内外の臨床の現場で目の前の患者さんが助かって、直接「ありがとう」と言ってもらえることもとても嬉しい原体験ですが、それだけでは目の前の人を一時的にしか助けることができず、できることに限界があります。しかし保健システムを改善することは、根本的で包括的な課題にアプローチし、持続的に改善される可能性を持っています。そしてそのような体制を作るように働きかける共通規範を策定することは、大きな影響力があると感じました。



レジデント医師として調査訪問したラオスで。実際に少数民族の住む地域を訪問し、お話を聞く機会を得た。

国際医療協力局に入職したきっかけ、理由を教えてください。

一般的に途上国は脆弱性が高く、格差が大きく、資源が限られていることが多く、先進国と大きく状況が異なります。そのため優れた取組を途上国から先進国、ないし先進国から途上国に取り入れる際に、いかに適応するか、に熟練した技が求められると思います。私が国際医療協力局に国際臨床レジデントとして在籍していた時に、この能力に秀でた局員の方々が、それぞれの過去の経験から培った強みを活かしながら活躍している様子を拝見し、いつか局員として国際医療協力に携わることを希望していました。

また、国際医療協力局の面白い点は、JICA専門家として途上国の病院等の現場近くで働く局員がいる一方で、WHOやGlobal Fund等の国際機関で働き現場経験を政策に還元するといった、様々な働き方をしている局員がいるところです。国際医療協力局の活動する対象国は紛争が終了した開発国が主であったのに対して、私自身は紛争国の避難民や難民に関心があったことや、NGOという大きな国際協力のファクターを経験してみたいという理由もあり、海外の大学院で人道支援を学び、まずは国境なき医師団で小児科医師として紛争現場で勤務しました。その後、結婚などの私生活のタイミングもあり、入局しました。



大学院卒業。多くの国からやってきた留学生と一緒に学び、議論を深めることが出来た、楽しい思い出。



国境なき医師団（MSF）としてイエメンに勤務。紛争地で働くことは、医療者だけでは解決することの出来ない原因で苦しむ子供達と向き合う日々となった。

入局後はどのようなお仕事に従事されたのですか。

入局後の業務で特に印象に残っている仕事は岡山県で地方保健行政に携わったことです。私が局したのはCOVID-19の国内流行開始後の2020年秋で、2021年春より岡山県庁に出向しCOVID-19の対策に携わりました。私が所属した医療調整グループでは、県下で発生した陽性者全例の療養区分を保健所と相談して調整し、入院が必要な患者に対しては入院先や転院先を24時間体制で選定しました。同時に、今後を見据えた体制案を提案し、早期治療を促進したり、自宅療養体制を拡充する整備を行いました。私自身にとっては紛争国での患者診療と同様に限られた医療資源で患者救命に携わっていた感覚でしたので、国際医療協力と国内医療協力との境目がないなと実感する経験でした。



岡山県出向時代にへき地医療の視察で乗船した巡回診療船「済生丸」。都会と田舎の医療格差の問題は国内外共通の課題。

——— 今後はどのような展望、夢をお持ちですか。

難民や紛争国の患者家族、医療従事者と出会う中で、どんなに辛い状況にあっても一握りの希望があればまた立ち上がることができる、ひとは強い生き物だと感じています。そして健康はその希望を持つための基盤となるものです。一番辛い状態にいる人がもう一度一歩踏み出そうと思える社会になるように、国際医療協力を通じて貢献したいと思っています。

——— 最後に、これから国際医療協力の世界を目指そうとしている人にメッセージをお願いします。

国際医療協力はどんなキャリアの段階でも、その時々でさまざまなかわり方が出来ると思います。今回のCOVID-19が世界中に広がったように、健康の課題に国境はないので、自分の培ってきた経験を国際医療に還元することを、もっと気軽に捉えていただけたらと思います。

是非、一緒に頑張っていきましょう。



——— ありがとうございました。